



るりるりボランティア記 第4号

サワディーカー。るりです。日本のお盆が近づき、友人から「タイに遊びに行くから」という連絡を最近よくもらいます。英語が通じると言われるバンコクですが、少しローカルな場所や屋台ではタイ語しか通じないことがほとんどなので、しっかりタイ語を勉強して友人との再会に備えたいと思っています。

さて、今回はお待たせしていました活動の様子と一人暮らしのお話をレポートします。

活動スタート

4月26日に実施されたTICA（Thailand International Cooperation Agency）主催のハンドオーバーセレモニーを経て、ついに私の配属先であるAPCDでの活動がスタートしました。TICAとはタイの国際協力開発庁のことで、JOCVはもちろんKOICAなど他ドナーからのボランティアの受け入れに関する調整業務も実施しています。JOCVが活動する国の中でもこれだけ組織的にボランティアの受け入れをしている国は珍しいかもしれません。ハンドオーバーセレモニー当日は、プログラムの中に隊員がタイ語で自己紹介を行うというものがあり朝から終始緊張気味の私たちでしたが、これから2年間活動を共にするカウンターパート（以下C/P）の人懐っこい歓迎のおかげで緊張は一瞬で吹き飛びました。そしてセレモニーが終わるや否やC/Pと一緒にそれぞれが活動する任地に向けて大移動。と言っても、バンコク中心部が任地となる私は、出発して30分ほどで、一人暮らしをスタートさせることになるアパートに到着したのです。

そして、いよいよ私の活動初日。

「Disability is a gift from the God. You can make the inclusive society」（障害は神様からの贈り物。あなたは全ての人にとって生きやすい地域社会を作ることができるのです）」と

APCD 所長からの歓迎の言葉に私ははっとしました。

「世界を変えられるのはマイノリティーだけだよ。」国際協力のフィールドでいつか働くことに憧れていた学生時代、教授からかけられた言葉を思い出しました。

「私に何ができるかな??」

まずは研修

私はJICAに入構して以来5年間「研修員受け入れ事業」に携わっていました。研修員受け入れ事業とは、開発途上国から招いた研修員（行政官や企業関係者など）を対象に実施しているプログラムで、日本の知見を自国に持ち帰り、その国の発展に寄与してもらうことを目的としています。

ここAPCDでも多くの研修を実施しており、これまで私が経験してきたことを研修づくりに生かしたいと思っています。今は、7月後半から8月の前半に実施する研修の準備を進めています。私にとっては今年1月にJICAを退職して以来久々の研修づくりで、どんな2週間になるのか今から楽しみです。研修期間中に数日間私が日英の通訳をするチャンスもあるので、不安もありますがしっかり勉強して臨みたいと思っています。



APCDのベーカリーで、ディスプレイの点字を触っているところ。

私にとってのバンコク

「タイなんて開発途上国じゃないよ。特にバンコクは」

タイに来る前、確かにそう聞いていました。4か月程タイに住んでみて、私はその言葉に同意することはできません。一番それを痛感するのが歩道を歩いているとき。ブロックが外れていたり、歩道と車道の段差や歩道橋の階段1段1段の高さがバラバラだったり、誘導ブロックを頼りに歩いていくと木や電信柱があることすらあります。もちろんほとんどのエレベーターに点字の表示や音声案内はありません。だからと言って一人で歩けないわけではありません。白杖があれば十分一人で行動するのが可能というのが私の認識です。

一人暮らしを始めるタイミングで、私は約20時間の歩行訓練をバンコク盲学校の先生から受けました。想像以上に歩行訓練をする技術が高く驚かされました。日本でも引越したタイミングや、頻繁に行く場所ができたタイミングで私の場合は歩行訓練を受けていました。日本には歩行訓練士という職業があり、視覚障害者が安全に外を歩けるようになることをサポートしてもらえます。

私の場合は全く視力がないので、視覚から入る情報を頼りに歩くことができません。その代わりに音や触覚、時には嗅覚から入る情報を使って歩きます。その情報を整理して伝えてくれるのが歩行訓練士の役割です。具体的には、白杖があたるガードレールの網目が細かくなったら右に曲がる印とか、甘い匂いがして来たらケーキ屋さんの近くで交差点が近づいている合図などです。そのヒントになる情報と頭に入れた地図を照らし合わせながら普段私は歩いています。バンコクの場合は屋台が多いのでその匂いが歩く際非常に役立ちます。また、一般的に不便に思われる段差なども印として使えば貴重な情報源となります。



バンコクを一人で歩いているところ（向かって左側の女性が私）

それから、私が一人で外出するとき大きな助けとなっているのが通りがかりの人々です。日本に比べるとタイのインフラは不十分と言わざるをえません、タイ人がびっくりするほど助けてくれるのです。

「どこに行くの」とか「もうすぐ段があるよ」とか「何を買いたいのか」とか、声をかけてくれます。バスに乗れば「どこで降りるの」と車掌さんや乗客が聞いてくれ、降りる場所で必ず教えてくれます。バスの中で請求書を開けていたら「それは携帯電話の請求書だよ」と隣に座っていたタイ人が教えてくれるほど、フレンドリーで親切なのです。そんなタイ社会の力を借りながら、生活の幅をドンドン広げていきたいと思っている最近です。



次号も
お楽しみに！

